脱炭素先行地域・生駒市における
カーボンニュートラル実現と歩いていけるまちづくり

令和６年11月19日
公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
第12回環境シンポジウム

こむらさき　まさし
生駒市長 小紫 雅史

小紫 雅史（こむらさきまさし）

・奈良県生駒市長【3期目：奈良県市長会長】
・新しい霞が関を創る若手の会（プロジェクトK元副代表）
・環境省を変える若手の会代表
・立命館大学「霞塾」元客員講師
・2019年マニフェスト大賞優秀賞

昭和49年3月生まれ（50歳）
兵庫県出身 ／ 妻・３男１女

1997年3月　一橋大学法学部 卒業
2003年6月　シラキュース大学マックスウェルスクール
　　行政経営大学院修了（行政経営学修士）
1997年4月　環境庁（現 環境省）入省
　ハイブリッド自動車に対する税制のグリーン化、ローソンやモスバーガーとの環境自主協定の締結、レジ袋の有料化、プラスチック製容器包装の３Rなど
2007年3月　外交官として米国ワシントンDCの日本国大使館勤務
2011年8月　公募により生駒市副市長に就任
2015年4月　生駒市長に就任（現在３期目）

- テレワークや兼業可能なプロフェッショナル人材の採用、副業支援
- 「自治体3.0」「ワーク・ライフ・コミュニティ・セルフのブレンド」によるまちづくり
- 誰でも歩いて行ける場所に小規模多機能コミュニティを整備する「まちの駅」事業
- 「株式会社いこま市民パワー」の設立によるSDGｓ未来都市、地域経済循環の促進（政府の脱炭素先進地域認定）
- ビブリオバトル全国大会など、本と図書館を活用したまちづくり（2021年ビブリオバトル大賞、2020年図書館大賞優秀賞）
- まちなかバル、起業支援の「いこま経営塾」、生駒山のブランド化などの産業振興
- 市民等からの寄付を活用した受動喫煙対策、地域ネコの保護推進
- 不登校の概念をなくす多様な学びの場、個性を伸ばす教育（2022年ICT教育アワード経済産業大臣賞）　ほか

「こむらさきまさし」

komuchan2001

「生駒市役所
　　Web市長室
」

近畿の中心、けいはんなの中心

地理院地図（白地図）

生駒の観光資源

奈良先端科学技術大学院大学

生駒山上から眺める
大阪平野の夜景

高山茶筌

生駒ケーブル

宝山寺(生駒聖天)

◇人口　117,295人（少子化・高齢化が顕著）

◇大阪都心部まで電車で約20分

◇県外就業率　全国2位（域外消費率全国トップレベル）

◇定住希望率　88.9%

◇本当に魅力ある市区町村ランキング　奈良県1位

今日お話したいこと

Ⅰ　気候変動の影響と市民の関心

Ⅱ　脱炭素×まちづくりの実践！

　　生駒市版まちのえき

さいごに

　まちづくりとウェルビーイング

Ⅰ　気候変動の影響と市民の関心

気温の上昇

1日平均気温の年間平均(奈良県奈良市)

1992年	2022年
14.8℃	**16.2℃**

1日平均気温の月間平均（8月：奈良県奈良市）

1993年	2023年
24.6℃	**28.9℃**

＜気象庁公表データより＞

- 熱中症による健康被害　R3：約600人　R4：約1,000人
  ※奈良県消防救急課報道発表より
- エネルギー、電気代高騰
- 食糧価格などの高騰

日常化する異常気象

・強い勢力のまま台風が上陸するケースや、
線状降水帯の発生増加

・災害対策本部設置や
避難指示の回数の増加
・倒木による車の損壊事案などの発生

「脱炭素」はだれも反対しない、しかし・・・

Q. 市で取り組む施策分野の重要性について

順位	施策
1	医療
2	生活安全
3	防災
4	道路・公共交通
5	消防
:	:
24	**低炭素・循環型社会**

「令和4年度生駒市市民実感度調査結果」より

他の行政課題と比べて
市民の関心が低い
（事業者と比しても）

⇩

「脱炭素」の取組に
「行動を伴う」理解を
得る難しさ

だからこそ！まちづくり全体で考える！

環境問題をまちづくりに組み込む

⇩

市民の関心が高い分野、まちの課題・ニーズと組合せ

（少子高齢化　→　介護予防・健康づくり、買物・食事支援、子育て支援）

（域外就業・消費が多い　→　地産地消による地元企業活性化、地域経済循環の強化）

⇩

「結果的に」「知らないうちに」脱炭素になる社会の仕組みづくり

（環境問題に、環境の顔で取り組んではいけない）

Ⅱ　脱炭素×まちづくりの実践！
生駒市版「まちのえき」

歩いて行ける「まちの駅」のイメージ

●乗り合い自動車
（災害時非常電源）

地域コミュニティの場

市民　余った食料、本
食器、生ごみ

公園や自宅の緑化、栽培
などに活用

農業者

堆肥

新鮮野菜
米

環境・3R（コミステ）

●資源回収・分別
●生ごみを堆肥化
●もったいない食器市
●フリーマーケット
●家で余った食料

健康・文化

●百歳体操・軽スポーツ
●まちかど図書室
●音楽、文化
●出前講座
●移動保健室

フードドライブ

コミュニケーション

●地域食堂・Café
●地域サロン・お茶会

買物・食事・生活支援

●農産物の朝市
●スーパーの
　移動販売
●キッチンカー
●ゴミ出し・草刈り支援

子育て・女性活躍

●こども・地域食堂→持ち帰り
●託児・小規模保育
●コワーキング・テレワーク
●コミュニティでの創業
●公園を活用した子育ての場
●みんなのプール

地産地消、移動支援、地域活性化を、**地域の協創**で実現！

1.「まちのえき」が必要な社会的な背景

(1)公共交通・ライドシェアより効果的な移動支援

＜高齢化の現状＞

- 平均寿命　　：男性81.05歳、女性87.09歳
- 高齢者人口　　：3623万人(総人口比29.1%：過去最高)
- 75歳以上人口　　：初めて2000万人を超え、10人に1人が80歳以上
- 高齢者割合　　：世界で最高(200の国・地域中)
- 高齢者一人暮らし　：S55：男性4.3%、女性11.2%→R2：男性15.0%、女性22.1%

「暴走老人」「公共交通崩壊」報道

「認知症」から「移動支援、買い物・医療難民」へ

「免許は返納したいが、返納したら生きていけない」

⇒　人生100年時代を喜べない一人暮らし世帯の急増

＜移動手段の確保の難しさ＞

- 民間バスの支援：　他の行政ニーズとの均衡、バス路線以外の市民の理解
- 公共交通バス・デマンド交通：
  利用者少ない、赤字、バス路線以外の市民の理解
- ライドシェア：　事例少ない、タクシーと変わらない料金
- その他：　助け合い輸送、グリーンスローモビリティなど

どれも移動支援・買い物難民の切り札にはなっていない

↓

【問いの再構築】

交通手段の多様化と同時に、「歩いて行ける」場所に生活機能、コミュニケーションの場を創る方が効果的ではないか？

(2)核家族化を補う地域での子育ての場

＜少子化の現状＞

- 出生数　　：770747人(2022年・前年比40863人減：過去最少)
- 合計特殊出生率　：1.26(前年は1.30：過去最低)　⇒　さらに減少見込み
- 予定・理想の子どもの数：「1人以下」は6.6%、実際は27.3%
- 予定・理想と現実の乖離の理由
  - ◆「子育てや教育にお金がかかりすぎるから(52.6%)」
  - ◆「これ以上、育児の心理的、肉体的負担に耐えられないから(23.0%)」

- 他方、核家族化、共働き世帯増加など、家族の子育て機能の低下

⇩

現代社会において、子育て世帯の負担軽減には、子育て世代同士がつながる場、世帯だけでなく「地域で育児」できる場・機会が不可欠

(3)活用されていない自治会館、公園

- 自治会加入率： 78.0%(H22)⇒71.7%(R2)
- 高齢者の利用に偏る自治会館
- 利用規制・制限だらけで活用できない公園の増加

↓

- 住民ニーズに応える価値を生み、多様な世代が集まる自治会館
- 住民主体の多様な活用が実現する公園

⇒ 「歩いて行ける」場所にある資産を最大限活かす！

2.「まちのえき」の具体的な取組事例

（1）まちのスポーツジム（運動する）

（1）まちのスポーツジム（運動する）

＜背景＞

- 急速な高齢化、健康寿命の延伸の必要性
- 障がい者、子どもたちにも楽しいスポーツの普及

＜概要＞

- 市民主体の体操教室で健康づくり
- ボッチャ、モルック、グラウンドゴルフなど

＜効果・意義＞

- 頭と体を同時に使うことによる高い健康増進効果
- モルック・ボッチャなどは全世代、障がい者も参加可能
- 集客力の高さを活かせる

（2）まちのショッピングセンター（買う）

（2）まちのショッピングセンター（買う）

＜背景＞

- 買い物支援が必要な市民の増加
- 多様な販売方法への転換を模索する事業者

＜概要＞

- 400種類の商品を扱う移動スーパー
- 地元農家の朝どれ野菜販売
- 出張駄菓子屋
- 大手小売事業者の実証事業（赤ちゃん本舗、花王ほか）

⇒　近くで買える（高齢者の移動支援、子育て世帯の負担軽減）
⇒　野菜などが安い、フードロス対策など

（3）まちの食堂・喫茶店（食べる）

（3）まちの食堂・喫茶店（食べる）

＜背景＞

- 高齢者夫婦や一人暮らし高齢者の世帯の増加
- 要介護や死亡リスクが高くなる「低栄養傾向」の高齢者の増加
- 1日3食が辛い子育て世帯
- 食事の提供で創業を考える人の増加（飲食店・主婦など）

＜概要＞

- 自治会館での地域食堂、軽食サロン
- キッチンカーの出店

＜効果・意義＞

- 安い、おいしい、楽しい、みんなに役割

（4）まちの図書館（読む）

（4）まちの図書館（読む）

＜背景＞

- 子どもをはじめとする「読書離れ」
- 公共図書館の増加（20年間で600館以上、約24％増加）、集客力の高さ
- 通うのが難しい住民の増加
- コロナ禍に、自宅の本や漫画を断捨離したいというニーズ

＜概要＞

- 自治会館にDIYで本棚を作成
- 各世帯から本・漫画・絵本・DVDなどの寄付（断捨離）
- まちの図書室での貸し出し、ビブリオ、読み聞かせなど

⇒　通いやすい、男の人の出番、公立図書館との連携

⇒　断捨離、柔軟な運用（漫画、DVD、お茶）、いろんな本の企画

（5）まちの学校・塾（学ぶ）

（5）まちの学校・塾（学ぶ）

＜背景＞

- 「協働的な学び」の必要性
- 子ども同士が教え合い、大人と対話する中で、より深い学びを得、自信をつける

＜概要＞

- 自習室
- 出前授業
- 放課後子ども教室
- 学習塾、宿題合宿（斜めの関係から本格的な塾指導まで）
- みんなのセミナー

⇒　多様な学びの場、自律的で双方向の学び、地域での学び

（6）まちのアトリエ・スタジオ（演じる・観る）

（6）まちのアトリエ・スタジオ（演じる・観る）

＜背景＞

- 自治会文化祭が復活・増加
- コロナ禍で文化・芸術に再注目（活発な制作、人に見てもらいたい）

＜概要＞

- 自治会館で、写真展、絵画展、書展、文芸展…まちのアトリエ
- 一本のギター、エレクトーン、ストリートピアノ…まちのスタジオ
- カラオケも立派な文化活動

⇒　高い集客力、新しい生きがいの発見、観るから制作する側へ

（7）まちの遊び場（遊ぶ）

（7）まちの遊び場（遊ぶ）

＜背景＞

- 幼児期に外遊びをよくしていた児童は、体力も高い
- 低年齢層（0歳から満9歳）の子どもの74.4％がインターネットを利用

＜概要＞

- 公園をWSで再生、活用（1人当たり公園面積は増加、禁止事項の解きほぐし）
  - 鬼ごっこ、缶蹴り、縄跳び、ボール遊び、みんなのプール・ストライダーレース
  - 祭り、焚火・BBQ・焼き芋会、キャンプ
- 自治会館でゲーム（子ども）、健康麻雀（シニア）、ボードゲーム（多世代）

⇒　スマホ禁止・制限でなく、スマホ以外の面白さの提供
⇒　世代を超えて楽しむ、女性の麻雀ブーム
⇒　公園管理を地元で

（8）まちの農場（耕す、栽培する）

（8）まちの農場（耕す、栽培する）

＜背景＞

- 耕作放棄地面積：平成7年に24.4万ha、平成27年に42.3万ha
- ガーデニング・家庭菜園の市場規模は、コロナ禍もあり、2365億円と堅調

＜概要＞

- 農家の指導により、農地をみんなで開拓・管理・活用
- 収穫祭、焼き芋、BBQ、芋煮会
- ピザ窯、BBQプレートのWS

＜効果・意義＞

- 耕作放棄地の解消と農地の有効活用
- 収益確保、まちのえきの持続可能性
- 子育て世代の参加
- 地ビール企画・マルシェとの連携など発展可能性高い

（9）まちのリサイクルステーション（循環する）

（9）まちのリサイクルステーション（循環する）

＜背景＞

- リサイクルの不徹底（燃えるゴミ中、古紙類8.9％、プラ製容器包装8％、食べ残し17.8％（手つかずが8.5％））
- コロナ禍の断捨離ブーム

＜概要＞

- リサイクル品をいつでも出せる基地、壊れたおもちゃや家電の修理
- 子ども服やおもちゃ・本などのリユース・交換の場、フードドライブ
- フリーマーケット
- 生ごみ回収、量り売り
- メルカリ講座、メルカリを活用した断捨離促進

⇒　3Rの推進、モノを通じた交流、販売による収益確保

（10）まちの保健室・病院（診る・癒す）

（10）まちの保健室・病院（診る・癒す）

＜背景＞

- 高齢者の外出希望先2トップ「買い物」「病院」
  （買い物：80.7%、通院：45.2%、趣味・社会活動：44.6%）

＜概要＞

- 「まちの保健室」：健康体操、体力測定、健康相談・指導、介護者の支援
- 「まちの病院・診療所」：オンライン診療の都市部への対象拡大、在宅だけでなく公民館なども利用可へ

⇒　健康増進、医療費削減

⇒　身近な場所での受診、安心

(11)まちの保育園(育てる)

＜背景＞

- 子どもを育てやすい国だと感じる日本人は61.1%(他国より低い)
- 「地域で子育てを助けてもらえるから」「社会全体に理解があるから」と答えた人も減少

＜概要＞

- 育児相談
- 子育て世帯間の子育てシェア
- 地域での一時預かり、「家庭的保育事業」

⇒　子育て世帯の負担軽減、子どもの多様な学び、地域の活性化

(12)まちのオフィス(働く)

＜背景＞

- 企業のテレワークOK：51.2%、×：37.7%
- 自宅83.7%、シェアオフィス約10%

  「家族に気兼ね」「職場以外の人との交流や人脈」「買い物と合わせて利用」「自宅にこもらないように」など

＜概要＞

- 「まちのオフィス」は、自治会館の空き室利用したシェアオフィス

  → 近い、安い、子ども連れOK

⇒ 現役世代と地域との接点、現役世代にも地域活動にもプラス

（13）まちの避難所・交番（守る）

（13）まちの避難所・交番（守る）

＜背景＞

- 災害が増えているが、指定避難所まで歩いて行けない
- 犯罪件数や交通事故（特に高齢者）の再増加

＜概要＞

- 電気自動車（EV）を自治会館につないで簡易避難所に
- 平時、EVは青パト・助け合い交通にも活用
- 特殊詐欺や交通安全の啓発（1人暮らしの被害リスク軽減）

⇒　コミュニケーションと地域力で犯罪や事故を減らす

⇒　平時のつながりが災害時に生きる、近場で安全・安心を確保

3.「まちのえき」が
どうして脱炭素につながるのか

- 一人ひとりが買い物や食事等に車で出かけるのでなく、歩いて行ける場所で生活機能や楽しみの場がある
- 地産地消の野菜を食べることによるCO2削減
- みんなが一緒に冷暖房「Cool＆Warm Spot」←人が集まる仕掛け
- 自治会館に太陽光発電
- 青パト＆ライドシェア用のEV
- 本や子ども用品、食料のリユース（おすそ分け・シェア）

環境自体を目的にしてもうまくいかない！
地域を楽しみ、地産地消を進めれば、環境は良くなり、SDGsは具体化
⇒　楽しく人が集まる場所を作れば地域課題は自然に解決する！

おわりに

～まちづくりとウェルビーイング～

ウェルビーイングを実現する、
生駒市の「地域共生社会」のコンセプト

「誰一人取り残さない」＝「誰一人お客様にしない」

⇒すべての人が役割を持つ

- 地域活動に汗をかいた人の方が幸福度、満足度が高い
  （生駒市市民実感度調査の結果）
- 役割を持つことで、人を頼ることへの抵抗感が減少
  （地域に入れない高齢者男性への工夫）
- 自尊心を傷つけることなく、必要な人を支援できる
  （こども食堂の功罪）

ご清聴ありがとうございました！